

奥村明 著「セレベス戦争」(第6部)

マリンプン俘虜収容所

餓鬼道

収容所にはいると、小銃はもちろんのこと、将校の護身用拳銃まで一切の武器はとりあげられた。完全な丸腰で、旧日本軍の形骸をとどめるものは階級と形式上の軍隊組織である。階級をのこしておくことは、連合軍による俘虜管理上の便宜にすぎない。

阿部中隊は旧編成のまま、病院付属農耕大隊(大隊長原田大尉)に編入された。直属部隊長は病院長の北条和達軍医大佐である。

収容所はマリンプン草原内にあり、周辺に柵や鉄条網ははりめぐらしてないが、自動小銃を持った歩哨を配置し、俘虜の出入りを厳重に監視していた。歩哨線を一步でも突破する俘虜があれば、その場で撃ち殺されるしくみになっている。俘虜に与えられた労働は、農耕作業であった。

シベリアに抑留された俘虜たちの重労働にくらべると、南方諸地域の俘虜は、自給自足のための開墾・開発という名目であったため、精神的にも肉体的にも負担は軽かったはずである。南セレベスに収容された軍人・軍属・一般邦人は、合わせて約二万人であったが、ほとんど茅葺しか生育しない草原内の荒地へ放り出された格好で、途方にくれた。他地域の抑留生活と比べようもないので、あたかも自分たちだけが集団餓死へ追いやられたような、連合軍の酷薄非道を感じたらしい。西部ニューギニアから骨と皮ばかりになって移送されてきた俘虜の一群は、「マリンプン草原」の農耕にたちむかったとき、「ここでとどめを刺されるのか」と、思ったらしい。事実、彼らはバタバタと倒れていった。

私たちは農耕隊でも、病院隣接地域の休耕水田を耕作地としてあてがわれたため、「死の草原」の連中よりは幸運のくじを引き当てたといってもよい。ただし、収穫物は全部、病院へ納めなければならなかった。朝は八時から午後五時までの八時間労働である(昼食一時間休憩)。他人の苦痛はわからない。不毛の草原開墾とくらべて作業は楽であったに違いないが、自分たちが一番苦しいような気がするのだから、苦痛の尺度は他とくらべられないものらしい。私たちは二カ月

たつと音をあげはじめ、三カ月目には餓鬼地獄におちていた。

毎日の給養(食事)はひどいものであった。主食のコメは、一日一人あたり三百十グラム(二合一勺)と決められていた。共同炊飯なので、食事どきになると各隊の週番上等兵が使役を引率して、炊事場から飯櫃、汁缶を運んできて分配する。ここまでは旧日本軍と同じであるが、中身が全く違った。主食はどろどろの粥(朝食は水の量が多く、夕食は固いメシ、というような工夫をしたが)で、汁は油の浮いている中身のない薄味の塩(または醤油)汁か、ヤシ油でいためた臭い水草のカンコンくらいのもので、人間が八時間労働に耐えられるような食事ではない。食べ終わった瞬間に腹がすいた。

食事分配のとき、飯盒に盛り分ける週番上等兵のまわりにひしめき、一粒のメシ、一滴の汁の多い少ないで、俘虜たちは目の色を変えてあらそった。一日当たり主食の二合一勺はいつの間にか一合五勺に減っていた。ひと月くらい前までは「断食のつもりで、精神修養をしよう」と、たかをくくっていた連中も、「こりゃ、中間搾取だ。どこかで、おれたちの米をちよろまかす奴がいるんだ」と、叫ぶようになった。

歩哨線の厳戒で、外部との交通は遮断されていた。インドネシアの住民と物々交換もできなかった。収容所内は、ヘビもトカゲもカエルもカタツムリもいなかった。手をつくして探したあげく、やっと見つけたのはスペリヒュという野草であった。日本でも真夏の地面にはい茂る雑草で、関西でタコ草と呼んでいるが、食べられるしろものではない。午前中だけ小さい黄色い花をつける緑褐色の、茎も葉もツルツルした草で、きわめてアクが強い。葉を飯盒で煮炊きし、水を増して何度も何度もアク抜きをして塩味でゆでると、なんとか野菜の代用になった。というより、大量に採取することによって、いささかの満腹感を味わおうとしたのである。

その結果は、激しい下痢であった。労働者は、米だけ食うなら一日四合を必要とする。一合五勺(約二百二十グラム)でやっていけるはずがない。いくら敗れたとはいえ、人間を餓死状態に追いこんでニタニタ笑っている極悪非道の悪魔は、一体だれなんだ。そ奴のくちびるは暑いビフテキの血で濡れ光っているだろう。もちろん、そ奴というのは、緒戦に日本軍からさんざん痛めつけられた連合軍だ。

「日本軍は悪いことをした。自業自得だ」

と、奴らは嘲笑している。そうかもしれないが、お前と俺は、胃の腑はおなじなのである。胃袋が悲鳴を上げ絶叫しているのだ。どうしようもないではないか。

私たちの怒りは最初連合軍にむけられ、それから同胞へ移っていった。同胞とは、糧秣を連合軍から宰領して管理する貨物廠関係者、直接炊事にあたる炊事場関係者のことである。しかも一合五勺の米も、さらに一勺、二勺と減らされていった。病人は続出した。入院は「死」を意味した。死にかけた者でないと入院が許されなかったせいでもあるが、死者は毎日のように焼かれ、死臭は収容所の居室までながれこんだ。

私は原因を知りたかった。連合軍の配給が、俘虜を餓死に追いやるために意識的な減量をおこなっているのか。それとも、糧秣管理者が中間搾取しているのか。私は怒り、手を尽くしてしらべあげた。

その結果推量できたことは、連合軍の配給量は、規定通りの一人一日当たり三百グラムで間違いなさそうであった。連合軍から糧秣を運んでくる途中で、運搬に従事した使役兵がいくらかくすねる。それを監視する連合軍の歩哨たちがいくぶんかくすねる。貨物廠では役得としていくらかくすね、各隊の炊事場では炊事要員が腹一杯食べた残りを、平等に一般俘虜に分配する。これでは二合一勺が一合五勺となり、一合となっていくのも当然のなりゆきであった。その上わかったことは、貨物廠の者が米を代償に、病院から薬用アルコールを取得して晩酌までやっているという事実であった。

「ちくしょう、同胞相食むだ。俺たちは八勺が五勺になり、しまいには水だけにしようってのか。一万九千五百人が餓死しても、五百人が満腹するって次第か。叩き潰せ！殺してしまえ！」

私は腹の中が煮えくりかえった。そして、このように怒る自分を(しわよせで死に瀕しつつある全俘虜の荒廃ぶりをふくめて)悲しく思った。むきになって調査したこと自体、私が餓鬼道におちた証拠だからである。とはいえ、この事実をぶちまけると、俘虜たちにパニックが生じて貨物廠に殴り込みなどというような事態に発展しないともかぎらない。私は暴動の火付け役にはなりたくなかった。

もし、米騒動が起こるような場合、みっともないのは連合軍に対してである。いくら落ちぶれても白人に醜態を見せたくなかった。日本人の矜持を失いたくなかった。「武士は食わねど高楊枝」でいけるなら行きたい。あさましい餓鬼になるより毅然として餓死するならそのほうがよい。もし、南セレベスの俘虜全員を餓死させたとするならば、国際的な弾劾をうけるのは連合軍の收容所責任者であろう。最後の戦いはここにあるかもしれなかった。飢餓の拷問で追いつめようとする意図が連合軍にあるとすれば、骸骨になるまで日本人の尊厳を護らなくてはなるまい。それが結局、彼らに勝つことになるのではあるまいか。(ああ、きれいなことを言っているが、腹の虫がクイクイ鳴きやがる。食いてえなあ)

「貨物廠や炊事のやつらを見たか？」と、俘虜たちは言った。「ぶくぶく太ってやがるのは、何よりの証拠だ」

案の定、俘虜たちの憎しみは、太っている同胞にむかって爆発しかけていた。いまにも、殴り込みに行きそうな雲行きであった。彼らは、あばら骨のむきだした痩せた胸を叩いていきまいた。目は三角にとがり、くちばしは「餓鬼鳥」とでも形容したいほど、人間のあのやわらかい唇の形も色も失ってしまった。彼らは、太った同胞を嫉妬し憎むことによって、団結を保とうとしているかのようであった。事実は、利己主義のかたまりになっていただけだが。

「まあ、騒ぐな」私は言った。「みっともない騒動は起こさんようにしてくれ。俺たちは檻のなかに

いるんだ。へたなことをしてみろ。バリバリバリと自動小銃が鳴るだけだよ。皆殺しなんかわけもない。おれたちの目的はなんだろう？ 生き抜いて内地へ還ることなんだよ。もう少し辛抱するんだ。家には妻子がまっているんだろう」

「あと五年も待ってっていうんですあか。じょうだんじゃねえ、みんな死んじゃうよ。ちくしょう！あの炊事軍曹のでっぴりしたケツの肉、えぐりとってスキヤキにしてやりてえ」

「それより、一個の芋の収穫を考えよう。もうすぐ芋が食える。仕事に馬力をかけろ」

私たちは、ひよろつく足をふみしめながら、農機具を担ぎ、農耕地へ出かけて行く。最初、私は小隊の指揮者として直接鋤をにぎることがなかった。作業の監督をしていればよかった。しかし、部下を励ますだけでは能率があがらなかった。言うことをきかなかった。私は率先して鋤をにぎり、円匙を使った。

ぶつぶつ文句を言う男にかぎって、働かないこともわかってきた。炊事へおしかけようと扇動していた男は、だれよりも休憩をむさぼっていた。

餓死寸前での農耕作業はドレイ労働である。人権を主張するなら、怠業も当然といえるであろう。ただし、人間が極限状態に置かれた場合にどのような反応を示すか、各人毎に観察するのは興味深かった。「こんなメシで働けてというのがムチャなんだ。一日中眠っていても体力は保てない」など

と文句を並べ立てている者にかぎって、サボタージュは内面の苦痛を強めているはずであった。むしろこの場合の療法としては、力の限界内で自己のノルマを遂行することであった。もちろん、この場合ははげしい精神力を要するので、実行できる者は少ないと思う。しかし私は、いつも控えめで黙々としていながら、前向きの姿勢で農耕に取り組む数名の男を、長い収容所生活のうちに発見していた。

私が率先して兵士の二倍は働いてやろうと決意したのは、餓鬼道に落ちている自己への反省からであったが、第二小隊長山下曹長に触発された点もあった。悪性マラリアで入院中の谷口少尉の代理で、前任曹長の山下が第二小隊長になっていたが、農耕作業の際、彼は真っ先に鋤をとる。栄養失調のへっぴり腰で、ぶっ倒れそうになるまで働く。これは、体で示す部下掌握法にちがいない。しかし、私が観察したところによると、責任観念だけでなく彼は自ら極限状態における人間の生き方としてそれをえらんでいるのにちがいなかった。強靱でストイックな意思を私は感じた。私は指揮監督者の立場に甘え、なるだけ体力を消耗しまいとばかりだった。若いくせに卑怯ではないか。私は四十二歳の山下曹長に頭が下がった。そこで私は発奮したのであった。

また私は部下からも教えられた。鈴木曹長（東京都出身）、西脇軍曹（新潟県小地谷市出身、乙幹）、松本軍曹（川崎市出身）、星軍曹、田原軍曹、松本伍長などの下士官、榎谷兵長（佐渡島小木町出身）、小野兵長（関東出身）、川崎上等兵（関東出身）高橋上等兵（関東出身）、田辺上等兵（横浜出身・横浜大学卒）、金子上等兵（関東出身）、渡辺上等兵（新潟県西蒲原郡出身・

私の伝令)、永島上等兵、松田一等兵など、一度も不平不満をもらさない謙譲で清廉な常日頃の態度を思い浮かべると、目をあらわれるような気がした。指揮官でありながら、隊員の人間性を見る目がなかった自分の稚さに気づき、目をさまされた思いであった。考えてみると、軍隊における階級は人間的な優劣とはなんの関係もない。将校であったため私は背伸びし、成長もしたけれど倣っていたことも事実である。

支給されたサツマイモの苗から、四月早々になってやっと、少量であるが収穫できるようになった。中隊は週に一食だけ食えるということだ。そこで、わたしは大隊長にもほんのすこし献上した。大隊長も兵と同じ配給のカユで我慢していることを知っていた。さぞ喜ぶにちがいないと期待した私に向かって、士官学校出の若い原田大尉は言った。

「おれは、この芋を猛烈に食いたい。貴公の志に感謝する。だが、もって帰るがよい。これを栽培した兵士にひとときでも食わしてやるんだ。」

「しかし…」

「命令だ！」

原田大尉は叫んだ。私はここでも一人のサムライをみた。(たとえ餓死しても、廉潔を保つのだな)私の決意がさらに固められたのは、このときであった。

アンボン軍曹

南方戦線で終戦と同時に武装解除され、連合軍に抑留された日本軍人・軍属たちの生活は、地域によって変わるということはほとんどなかったであろう。基本的には、労働—飢え—郷愁—復員船、という経過をたどり、食料事情もほとんど変わらなかったと思う。南セレベスの俘虜収容所が、特に他と比べて厳格であったということもない。変わったところがあるとすれば、例えばフィリピンは米軍、マレーは英軍というように、収容所の管理者が南セレベスではオランダ軍、オーストラリア軍であったというに過ぎない。

しかし、私たちはオランダやオーストラリア軍の正規将兵を一人も見ることがなかった。私たちを監視し、直接触れ合い、また、歩哨小屋で見うける連合軍兵士というのはすべて、オランダの傭兵アンボン族であった。頑健な体力、剽悍な性格を特徴とする黒人兵であった。セレベス島の東南方八百キロのセラム群島中にあるアンボン島は、オランダ人の香辛料宝庫といわれて、十七世紀以降二十世紀に至るまでのオランダ統治時代の最大の金蔵であった。アンボン族の兵士としての適性に目を付けたオランダは、アンボン族を傭兵として重用した。マレー方面の日本人抑留者が英国人でなくインド兵に直接監視されたように、セレベスの日本人抑留者の監視役としてオランダ軍傭兵のアンボン族があてられたのである。

ところで、アンボン兵は戦争中、日本軍の俘虜となってセレベスの日本軍俘虜収容所で服役したものがかなりの数にのぼっていた。下士官以上のオランダ人俘虜は、緒戦当時、日本内地の収容所におくられ、軍需工場で働かされた時期があるという。その中に、アンボン族の下士官も混ざっていたらしい。私達の周辺では、たかがオランダ傭兵の「黒ん坊土人」と思っていたが、彼らは日本人を憎み、呪っていたのである。

私たちがこの収容所へ入った当時、連合軍は俘虜心得の一つとして、「アンボン兵には敬礼すべし。怠る者は銃殺に処する」と、きびしく規定していた。いかに俘虜とはいえ、将校が黒人の下士官兵に敬礼するのは、脇の下がくすぐったくなるような沙汰であったが、私はじっと我慢した。銃殺されるより「泣く子と地頭には勝てぬ」とあきらめた方がましである。しかしある日、私はうっかり、アンボン軍曹に欠礼してしまった。

私はなにやら考えごとをしながら農耕地を目指していた。なぜ一人で歩いていたのかわからないが、もの思いでいっぱいになった頭のなかに、周辺の風物もみえず、音もきこえなかった。うしろからジープの爆音が聞こえてきて、急に思念が断ち切れ、はっと立ち止まったときにはおそかった。ジープは私のそばを通りすぎたが、私が欠礼したことに気づいたのである。ジープは七、八メートル先で止まった。飛び降りて引き返してきたのがアンボン軍曹であった。

血相かえて走り寄ってくる軍曹にむかって、私はあわてて挙手の敬礼をした。軍曹はもちろん答礼しなかった。にらみつけるヘビのような視線に、わたしは観念した。しかし、不動の姿勢をとり、必死に挙手の礼を続けていた。軍曹は無言で近づき、自動小銃の筒先を私の心臓部に押しつけてぐいぐい押しまくった。私はよろめいて後退した。心臓部に衝撃がくれば最後なのである。それでも私は、栄養失調のふらふら腰に力をいれてふんばり、挙手の礼を崩そうとしなかった。「やられる」と思った瞬間、軍曹はわたしの顔に唾を吐きかけた。屈辱のなまあたたかい唾しぶきに私は思わず顔をそむけた。どうせこんなことで殺されるなら、相手に噛みついて血だらけの決闘を挑んでやろうかという憎しみが沸き上がった。だが、私は顔を拭こうともせず、ぶざまな恰好ながら挙手の右手をおろしていなかった。軍曹はマレー語で、早口の悪態をついて、さっと身をひるがえした。

気がつくやうに、軍曹をのせたジープは土煙をあげて走りさっていた。(ああ、助かった……)私ははじめて手拭いでごしごし顔の唾をぬぐいとった。勝てば官軍である。耐えねばならぬ。私は笑おうとして顔をゆがめた。不覚にも、滂沱として涙が頬を伝わりながれた。悔しかった。そのとき私は、あの軍曹とに間に危険な何かの確執が生じることを予感した。

昭和二十一年(1946)四月上旬のある日、作業を終えて将校バラックへかえったばかりの

(2ページ欠落)

「榎谷兵長以下六名であります」と、一列横隊に整列してから榎谷がいさぎよく私に告げた。

「よし、六名を処刑する。こっちへ来い」

軍曹はあごをしゃくった。その瞬間、私は夢中で六名のまえに飛び出していた。躍り出るや裂ぱくの気合をかけ、「このバカヤロウ！、ばかやろう！」と、狂ったように叫び、榎谷の頬ゲタをなぐりつけた。つづいて木下以下五名を、顔がひんまがるほどたたきのめし、さらに榎谷へとびかかっていった。彼らはよろめき、倒れても起き上がり、不動の姿勢を持ち直して私の制裁に耐えた。阿修羅のような鉄拳制裁のものすごさに、俘虜たちはもちろんのこと、アンボン兵も息をのんで茫然と眺めている。六名の顔は紫色にゆがみ、唇から血をふきだしていた。私の手も腫れあがっていた。

私は軍曹の前に土下座して両手をついた。

「私を殺してもよい。だから、このテロル(たまご)の犯人を許してやってください。私を撃ってください。」

日本軍人のすさまじさと、あくまで無抵抗の不動の姿勢で、血だらけになっても耐える兵士の服従を、かれらは驚異のまなざしで受け止めたのだ。感動か、敬意か、恐怖か、それとも溜飲を下げたのか、彼らは銃口を向けることも忘れ、自動小銃の床尾板を地面につけて、息をのんだ。軍曹は啞然として私の土下座を見下ろしていたが、

「責任者の将校にまかせよう。今回に限り、ここだけの話にしておく。ただし、ふたたび同じような事件をおこすなら、絶対に銃殺だぞ」と言い捨て、さっとジープの方へくびすをかえした。

「気を付け！アンボン軍曹殿以下に敬礼、かしら、右1」

私は、ほとんど泣き声で号令をかけた。助かったのだ。うれしく、また、かなしかった。(榎谷らには、すまんことをした。でも、おれには一世一代、いのちがけのビンタだったのだから。これ以外になかった。どたんばに追いつめられた若造の知恵なのさ。ゆるしてくれよな。だが、うまくいったじゃないか)私は心の中で謝ったが、口にはださなかった。

「か、か、かいさん。解散」

どもりながらそれだけ言うと、私は小隊バラックをあとにした。精も根もつきはてていた。

翌日、昨日のアンボン一味の兵二人が小隊バラックを訪ねてきた。一同は戦慄し、今日は何を摘発されるかと恐怖にかられた。ところが彼らは、昨日物色しておいた兵士たちの、今ではボロとなり、しかしそれしかない大事な私物、万年筆、時計、銅メダルなどを強要し、奪い取って悠々とたちさった。勝者には泥棒も可能であるのか。神の裁判なら彼らこそ銃殺ものであるはずが、白昼堂々と、貧寒の俘虜の私物を奪い去った。

かれらは米運搬の途中、歩哨の権限をもって米をくすね、村人へ横流して、ふところを肥やしていた。それがため、私たちの主食は減らされていった。これをじっと我慢するということは、「ケ

ツの毛までぬかれ、骨までしゃぶられる」にまかせることであった。抵抗すればたちどころに、十六連発のお見舞いだ。私たちは相手が黒んぼのアンボン兵であるだけに、このときほど虜囚の辱めを身をもって痛感したことはない。

さらに私を激怒させたのは、「ここだけの話とする」と誓ったはずのアンボン軍曹が、病院長北条大佐に報告していたことである。病院長は、六名の犯人を無期重監獄に処すから

(2ページ欠落。 文庫本原本の234, 235ページ)

私は聞いていて悲しかった。反発する力もなかった。こうなると日本人の矜持など説教したところで、なんの価値もない。ここへ暮れまでに、何とかしなければならぬはずであった。それができなかったのは、指揮官の無能というよりない。餓鬼道を卑しく悲しく思ったころは、まだ心に余裕があった。人間の生命をぎりぎりのところで維持する食物への執着は、道徳で律しられるものではない。動物はみんな同じで、どたん場に追いつめられると、人間だって猪だって蛇だって小さい虫けらだって、相手を食い殺しても生きなければならない。私は慄然とした。(人肉を食ったって、道徳という秤にはかけられまい)

私はしかし、部下が暴動をおこす前に上官に相談しようと決意した。その時、奇跡が起こった。「全員、ただちに大隊本部に集合」

伝令が小隊バラックへ大隊長の集合命令を伝えてきた。十五分後に、各中隊は本部前広場に集合を終えた。原田大尉が正面壇上に立った。いつもより颯爽としてみえた。

「昭和二十五年までに、南方諸地域の日本軍俘虜は全員、内地へ送還されるはずであった。ところが、アメリカの船舶が大量に復員船として充てられることになった。南部セレベスの軍人、軍属、在留邦人は、ここ一カ月の間に日本へ送還される。わが大隊の出発は、おおむね六月中旬の見込みだ。詳しくは、各隊長から指示することになろうが、身辺の準備をしておくように。終り」

まさに寝耳に水、青天の霹靂といってもよい。一同はざわついた。(やった！、やった！)

大隊長がデマなどをとばすはずがない。よろめいていたいた足はしゃんと伸び、目はかがやき、狂気乱舞している者もいる。まさに、処刑寸前の死刑囚が皇帝の特赦で無罪放免を言い渡されたようなものであった。襲撃の陰謀などは一挙に吹き飛んでしまった。泣き、笑い、歌った。(そうだ、戦争はほんとうにおわったのだ。私は無性に一人になりたかった。

復員船

さらばセレベス

私たちはトラックを連ねて収容所の門をでた。無期重営倉の榎谷兵長以下六名も、釈放されてトラックに乗っている。(ざまあみやがれ、アンボン兵。アバヨ)

マリンプンから乗船港パレパレまで、二時間で到着した。六月五日の朝のことである。検閲広場前に集結してオランダ軍の検閲をうけた。各人の持ち物は既定されていた。

「おい、この金時計、どっかへかくして持って行ってくれよ。おれは五個ももっているんだ。じゃ、船のなかで……」

野間軍曹が百田上等兵に時計を押し付けている。よくばり下士官もいるものだ。私は、規定以外の隠し物は一つもなかった。欲も得もない。裸一貫でよかった。私物などオランダ軍に全部とられても、内地へ帰りさえすればよい。ただそわそわと検閲の順番を待っていた。

「少尉殿、日本軍俘虜収容所時代のオランダ俘虜が、首実検にきているでしょうか」

顔見知りの憲兵軍曹が、私の姿をみとめると、不安そうな表情で近づいてきた。

「さあ？」

「もとの私に見えますか」

軍曹はそう言って、胸ポケットから厚い鉄ぶちのがbb協をとりだしてかけた。彼の鼻下には黒々とヒゲがたくわえられていた。

「まるで別人だ。どうしたの？」

「じゃあ、のがれられるかな」

軍曹はわたしに、懺悔するかのように語った。かれは南セレベスの俘虜収容所に勤務していたとき、オランダ人俘虜を虐待した。もし、当時の収容者が検閲に立ち合って首実検をするなら、たちどころに乗船を止められブラックキャンプ入りとなるだろう。生きて帰る見込みはなくなるというのであった。

戦時中、あきらかに残虐行為をしたとみとめられる日本軍将兵は、マリンプン俘虜収容所へ到着と同時に逮捕されていた。彼らは直ちに、戦犯としてハルマヘラ島東隣りのモロタイ島刑務所へ送られ、銃殺もしくは禁固刑となった。目下、裁判中の案件もあった。軍曹はオランダ軍のブラックリストには載っていなかったらしい。今度の検閲が最後の関所であり、死と生のわかれみちになるはずであった。

「大丈夫だろう。変装がなかなか堂にいつているじゃないか。おどおどせんことが肝要だろうな。大いばりで検閲をうけることだよ」

私は軍曹をなぐさめた。その点、私は何の不安もなかった。私は敵に遭遇したこともなく、虐待のしようもなかった。だがそれは、偶然でしかなかった。もし、昨年七月にドンガラにおいて、また、

「敵航空不時着兵を現地処分せよ」の軍命令にしたがうような状況におかれた場合、わたしとて、手をくさなかつたとはいきれない。私は敵兵をころさず、俘虜収容所で勤務することもなかつた。それだけのことで、軍曹の俘虜虐待がどんなものか知る由もないが、軍曹もまた、上官の命令で動いたことにはあまい。

わたしは、残虐な性格をもつ日本軍人をかなり見てきた。私はそのような同胞を嫌悪し、にくみ、軽蔑し、情なくおもった。

だが、私は知っている。アンボン兵も私たち俘虜を虐待した。それでも、裁判にかけられたり、戦犯になることはあり得ないのである。

「このいやな気持ちを、誰かに打ち明けたかったのです」と、軍曹は言った。

祈るような表情をうかべ挙手の礼をすると、軍曹は急ぎ足に立ち去った。

私は第一陣の検閲をうけた。検閲官は、厳粛な顔つきのオランダ軍将校であった。一列横隊にならんだ私たちの顔を一人一人にらみつけるようにみつめた。官氏名を名乗ると、足元にひろげた私物を、補佐官(黒人もまじっていた)がひっくり返してしらべた。「オーケー」と、白人将校は私に告げて、となりへ移った。

検閲は簡単であり、こちらは公明正大であった。私は私物を包むと、身も心も軽く、検閲場の通路を走り出て、石だたみ岸壁へ向かって突進した。パレパレ港の沖に、白く塗装した米国のリバティ船が悠々と浮かんでいた。もう、大丈夫だ。大きく息を吐き、晴ればれとリバティ船を眺めた。

数十名がボートに乗り移り、一番乗りの海風を心地よく頬にうけた。ああ、私はたしかにこの足で復員船のタラップを踏んでいる。甲板にあがって、その片隅にテントを張り、私物をおろした。小隊を迎えるための設営作業である。それから、上甲板の手すりにもたれて、日本につづいている海の彼方、反転して、パレパレ湾内の小波を砕いてぞくぞくと本船にむかってくるボートの群れ、広がるセレベスの陸地と、遠い山々の稜線を眺めた。私たちは輸送船で激戦地へ出航していくのではない。潜水艦も魚雷も遭遇することはなく、爆撃もない。平和な海をわたって、ただ祖国へ帰るだけなのだ

私は、生涯最大のよろこびを、一人かみしめていた。

乗船が完了したのは、午後四時ごろであった。乗船者は、陸海軍将兵約三千名である。私たちの中隊は、穴倉みたいな暗くて蒸し暑い船倉内に居室をわりあてられ、一応装具を置いたが、すぐ甲板上へかけあがった。私が設営しておいたテント(数か所に分散したが)は夜も涼しく、見晴らしも快適であった。ここを小隊の寝所に定めた。

輸送指揮官は、病院長・北条軍医大佐である。六月五日出航の復員船リバティは第五梯団にあたり、あと一回の第六梯団で南セレベスの日本人はすべて引き揚げを完了する。第五梯団には入院患者のうち、重症者がかなり混じっていた。

午後五時抜錨。出航の汽笛が鳴った。なぜか、船内は静まりかえっていた。万歳の声も、軍歌

の合唱もない。戦時中の船出とはちがう。みんな、じっと汽笛に耳を傾け、ゆるやかに動き始めた船を手すりにもたれて眺めながら、万感の思いに耐えているようであった。陸岸は動き、静かに遠ざかる。「さようなら、さようなら」心で叫ぶが声にならなかった。

歓喜が、ある名状しがたい悲哀にかわっていた。船出の情緒が別離の哀愁をさそうのか、断腸の思いがこみあげてくるのであった。私の脛にセレベス奥地の秘境が広がり、そこにダブって山嶽地帯を登って行く隊列の中の、ぼろ布のようにあえいでいる自分の姿が、霞のなかに浮かんでくる。あの、言語に絶する地獄の苦痛が、なつかしく、うしろ髪をひいているのであった。(もう、二度とここへくることはあるまい)

それから私は、元の関根部隊の部下の顔を思いうかべていた。なつかしいやつらだ。狩野軍曹(関東出身)、岡村軍曹、中川伍長(奈良県出身)、堀川伍長(奈良県出身)、川辺兵長(東北出身)、永井上等兵(台湾出身)、安岡上等兵(台湾出身)、岡本上等兵(九州出身)、大河内一等兵(和歌山出身)などの顔が脛をすぎた。(いまごろ、どこにどうしているだろう。どれかの復員船に乗っていればあいいが。縁があつたら日本で逢おうぞ)

船は白波を蹴立てて、南マカッサル海峡を全速で北上しはじめた。うす紫に暮れなずむ海と空を眺めつづけ、出港時の感激が遠のくと、私たちはいつかテント内の居室に戻り、日常的な船の乗客の気持ちになっていた。そこへ、船内最初の夕食が運ばれてきた。私たちは驚嘆した。収容所で食わされていた、あの一食で五勺にも満たないネズミの小便臭い粥ではない。かたい銀メシがもりもりとアルミ製ボールの容器に盛られ、副食は揚げ豆腐、小芋とタイの煮つけであった。無我夢中でむさぼり食った。一日に二合一勺たっぷりの主食と推定された。

リバティ船はアメリカ人の船員で操船されるものと思っていたが、甲板員、機関員ともに、乗組員はすべて日本人であった。私たちは船内で乗組員を見つけると話しかけ、夜、船室の窓越しに面会をもとめたりして、内地の事情を聴いた。東京の空襲のすさまじさ、広島長崎の原爆投下時の地獄図も、はじめて船員の口から知らされた。兵士たちは妻子の生死もわからない廃墟のただなかに帰っていく現実息をのみ、大きな衝撃をうけたと思われる。

私の留守宅は大阪府の境で、爆心地からは離れているし、何よりも独身者の身軽さであった。爆心地付近の戦友には相すまぬが、私は愁眉を開いた。リバティ船の乗組員は何度も海をわたって復員兵の輸送にあたっている。そのこと自体、私たちの航海が安泰であることの証明でもあった。

抑留生活中、あるいはそれ以前から、偏狭な日本的被害妄想から、「鬼畜米英」を一点のシミのように心の奥底に抱き続けた不信感も、船員の証言で洗い流された。「俘虜を無事に還すはずがない。途中で海に放り投げられるのがオチさ」という不安と恐怖は、私たちの無知からきたものであつたらしい。東京は進駐軍に占領されたけれど、皇室は安泰で、国民生活は保護されている。新しい民主主義国家は、復興の息吹きが盛り上がり、廃墟の中から不死鳥のようによみが

えりつつあるという。

私はいまさらながら、アメリカの底力に感じいった。このリバティ船にしたところで、アメリカの豊かな物量を物語るものであり、もし、日本軍俘虜をくるしめる目的があるなら、復員船の配船などしなかったであろう。「負けた。本当に負けました」私は痛切に思った。

出航後、私たちにくださった最初の命令は、「階級章をとれ」ということであった。兵士たちは惜しげもなく、むしろ喜々として上衣の襟から階級章をむしりとり、海中へ投げ込んだ。私も少尉の階級に未練を持つものではない。古ぼけてすすけた階級章の縫糸を切り、地の赤、縁取りの二本の金色の刺繍、中央の金筋と一個の星章をじっと見つめた。これは、私が日本帝国軍人であったことの唯一の象徴である。少尉という階級に未練はないが、赤道直下三千キロ、苦難をともにした「友」をどうして捨てられよう。そっと、私物の中へ忍ばせた。

しかし階級がなくなると、ずっと肩の荷がおりた。もはやボロボロの夏服だけで、どちらを向いても、将校も下士官も兵士もいなかった。年齢にふさわしい顔とからだつきの日本人集団がそこにあった。日本陸軍はもう、影も形もなくなった。それでいいんだ。一人の素っ裸の日本人として、祖国の土をふむのである。

わたしは奇怪な心境を経験した。階級章をなくしたあとで進級が発表され、軍隊手帳に新しい階級がかきこまれた。襟章をつけて凱旋することもない敗軍の復員に、なぜ、進級が必要なかわからない。おそらく、無形の贈り物で将兵をなぐさめようとする上司の人情と解釈するよりなかった。

私は進級しなかった。同時期に任官した少尉が、大した武勲をたてたとも思われぬのに中尉に進級した例を、私は見たり聞いたりしていた。私は幹部候補生時代から自由主義者として教官からにらまれた。見習い士官になれたのも不思議なくらいであったから、成績はいつもビリであった。今回のいわゆるポツダム中尉昇進からおとされたのも当然であるかもしれない。しかし、要領の良いゲータラ少尉がちゃんと昇進しているのをみると、私も人の子、はげしく怒りがこみあげた。私は戦闘に参加せず、敵兵を仕留めるなどはなばなしい武勲もたてなかったが、小隊長の責任はそれなりに果たしたつもりである。炎天下三千キロの行軍を命令通り遂行した。私一人だけが記録した稀有な実績は、敵陣地一番乗りの武勲にも匹敵するものではあるまいか。今回の昇進選考は誤りだ。私はしばらく怒りがきえなかった。

あとから思えば、戦争は終結し無条件降伏で日本陸軍そのものがなくなっている。にもかかわらず、まぼろしでしかない階級にこだわって進級選考の不合理的をむきになって怒った心境は奇怪である。滑稽と言ってよいかもしれない。

さて、私たちの復員船は日本に向けて針路をとり、夜も昼も波をけたてて進んでいる。上陸予定地は和歌山県田辺港とのことであった。

ランチ

復員船に乗り込んでから目的地へ着くまでの集団生活は、どこでも似たり寄ったりのものだろうと思われる。私の乗ったリバティ船で変わったことと言えば、船倉の病室で呻吟していた重症者が祖国の山河をみることもなく死んでいったことであろう。死者は上甲板まで担架で運ばれ、水葬にふされた。もう一息というのに生き残れなかった方は、セレベスの病院でも軍医に見放されていた重症者であったという。彼らは病院に残置されるのをいやがり、むりやり復員船に乗せてもらったらしいが、どのような心境であったろうか。死んで海に投げ込まれるとは思えばよらなかったにちがいない。

緒戦に壮烈な戦死を遂げた者も、終戦時、復員船のなかで病死した者も、ふたたび祖国を見なかつたことについて同じである。私たちは、祖国を目前にして思いを残して死んだ同胞の水葬に立ち合い黙禱を捧げたが、死者と生者の決定的な断絶のきびしさ、紙一重の運命でしかないところの「戦争」を、さらに強烈に思い知らされたにすぎない解放感と帰還の喜びで胸をいっぱいにした生者のエゴイズムは死者に対して冷酷すぎるがどうにもなりはしない。

私たち生還者は運がよかった。彼らは運がわるかった。そして彼らはこの戦争で損をした。犬死にをした。これが死者を葬るとき、私たちが体験したいつわらざる感慨であるが、復員船での水葬のあとで、わたしには別の考えがあらわれはじめた。全部の戦死者を含めて、彼らが決して犬死ではなかったことを、生き残りの私たちが立証しなければならない、という新たな義憤であるそうであれば、この生者と死者の断絶は、あまりにも不条理すぎる。

「おかげで乗船できましたよ」と、水葬を送った私に、例の変装軍曹が肩をたたいた。

「よかったね」私は元憲兵軍曹の幸運を祝福した。

「検閲広場には、元のオランダ兵俘虜は一人もでていなかったようです。。わたしは助かりました。まかりまちがえば、あえあれな水葬者よりひどい目に遭い、死んでいたかもしれない。そこで考えさせられたんですが、私たちが生き残ったのは偶然で、じつは何百万の戦死者の犠牲のうえに、生還できたのではないのでしょうか。つまり、日本が平和国家としてたちなおれるとするなら、何百万という英霊のおかげではないのでしょうか。私は英霊を形式的におまつりするなどという感謝の仕方ではなく、戦友として身をもって応えます。生涯を平和運動にささげるつもりです。俘虜虐待の償いとしても・・・」

私は名も知らぬ元軍曹のことばに胸をつかれた。はっと開眼するおもいであった。(そうだ、戦死者は犬死ではない。俺にも、しなくてはならないことがありそうだ)

私たちを運んだリバティ船が、和歌山県田辺港に投錨したのは(昭和二十一年)六月十五日の

朝であった。南セレベスのパレパレ出航後ちょうど十日目に、私たちは夢にまで描いた祖国の山河をちかじかと眺めたのである。国破れて山河あり。初夏の緑に包まれた日本は、信じられぬくらい美しかった。

あとは何事もなく復員船を降りるだけだ。上甲板の舷側の手すりに鈴なりになった人々は、みんなそう考えたに違いない。帰心矢のごとし、心はふるさとの家々をめざして走っていた。

しかし、平和で美しい紀伊半島の一角にある田辺港は、南方各地からの復員船がひしめいており、下船の順番を待って、今日、明日は船中で過ごさねばならぬという。すぐ下船できると思っていた私たちはがっかりした。気ははやるばかりで、何ともしようがない。時間はさび付いたように長く耐えがたく、うっ血した気持であった。

そのあせりと無聊に、人心の亀裂が生じたのにちがいない。リンチ事件が起こったのは、その夜のことであった。

リンチ事件は、どこの復員船でも起こり得たと思う。しいたげられた下級兵士が憂さ晴らしに、非道な上官に報復の鉄拳を加える。兵士たちの雑談中に、A 中尉、B 軍曹をやっつけようかというような声も、私はしばしば小耳にはさんだ。しかし、田辺に着くまで何事もおこらなかった。

私も、原隊にはにくむべき鬼のような上官がいた。そいつに、半殺しのビンタをくらい、今でも左耳に傷跡が残っている。もし、そいつが復員船にいたとしたら、恨み言の一言くらい言いたいところだ。私は部下を絶対殴るまいと心に誓い、あのアンボン軍曹事件に大芝居をやった以外は、一人の兵士も殴ったことはない。恨むべき上官もいなかった。その点、心やすらかであったし、今もはや美しい山河を目の前に、何の事件もおこるまいとタ力をくくっていた。

今なら、すべてを許せる心境にあるであろうし、分別ざかりの元兵士が上官(すでに階級のなくなったただの同胞)を殴ったところで、何の意味もないはずであった。ところが、事件はその夜おこったのであった。

夜、雨になった。南方では忘れていた寒々とした梅雨期の日本の雨である。私は甲板の手すりに寄って、夜の日本のなつかしい灯火のきらめきを眺めていたが、冷たく濡れてきたのに気づいて、テントへ戻ろうと歩きはじめた。そのとき、罵声と殴打の音が近くでおこり、黒い小集団がひとりを取り囲んでいる様子を目撃した。(いやなことが今頃になってはじまった)・・・私は眉をしかめ、しかし傍観者の態度でそばをすりぬけようとした。

やられている男がひょいと顔をあげたのに、私の視線は吸いつけられた。大隊副官の渡辺中尉(熊本出身、陸士卒)である。激しい気迫でがなりたてているのは、大隊本部の荒川上等兵(東京出身)で、このグループの中心人物らしい。このグループに私はこの日までほとんど関係なかったが、同じ大隊員であった関係上、渡辺中尉が俘虜収容所のとくに荒川一味をはげしく叩いたことを聞き知っていた。また、私が将校であったために、将校の渡辺中尉に味方しようと思ったのでもない。私はリンチを見てしまっただけだ。だが、被害者がいかなる人物であろうとも、集団をも

って暴力をふるう現場を見てしまった以上、私の気性として、通りすぎてしまうわけにはいかなかった。

私は猛然と割って入った。

「何事か！」兵士たちに言った。

「俺には理由はわからない。だが、つまらない真似はやめろ。二、三日したらみんな故郷へかえるんだらう？もう、やめなさい。中尉とはながいあいだ同じ苦勞をしてきたんじゃないか」

わたしの気力に押されたか、元将校の仲裁が功を奏したのか、荒川は口をひんまげて睨んでいたが、一同に引き上げるような身振りをし、しぶしぶ囲みを解いた。やがて、肩をいからせながら立ち去った。

「用心しなくちゃいけませんね。さあ、早く」

私は渡辺中尉をいたわり、足早にテントに戻った。八時ごろまで安心して毛布の上に横たわっていた。余計な手出しであったかもしれないが、やはり、いいことをしたような満足はあった。

テントの外でまた騒ぎがおこった。

「岩田兵曹長！マカッサルに上陸したときのこと、おぼえているか。よくも俺たちをひどい目にあわしたな。貴様！この野郎」

罵声と殴打の音。(今度は海軍だな。しょうのないやつらだ)私は舌打ちした。兵曹長はメチャメチャにやられているらしい。私はでていかなかった。いちいち仲裁に入る必要もなかった。また、全く見知らぬ者たちのトラブルに巻き込まれなくなかった。毛布の上に横たわり、じっと目を閉じていた。

『ざまあみやがれ！』そんな捨てゼリフがきこえ、あとは静かになった。ふくろだたきにされた兵曹長が濡れた鉄板の上にのびている姿を想像し、(たぶん、鬼兵曹長だったんだらう。相当うらまれていたらしいな)と、他人事のように考えていた。

遠く近くに、ざわめきがきこえた。罵声、肉を打つ鈍いひびき、うめき声、・・・私は頭をもたげた。これはいけない。あちらでもこちらでもリンチがはじまっている。渡辺中尉を皮切りにリンチの連鎖反応をおこしたのか。私は関係ない。寝返りをうって、考えた。

内地の港に入っているのに、この爆発は醜態というよりない。風が火事をあおるように、暴力は暴力を誘発する。おそらく張本人は、故郷が被災地で、家族に逢う希望も失った者たちの破れかぶれ、半狂乱の仕わざにちがいはない。だが火をつけると、平常心の者までが暴徒と化する素地は十分にあるのだ。

明治の建軍以来、日本軍隊の内部にはびこった私的制裁の悪習は、特筆に値する。上級者は下級者を制裁する権限をもっていた。二年兵が初年兵を教育するための愛の鞭は、いつか感情的に変形して、あらゆる方法がとられ、半殺しの残虐な殴打もまかりとおっていた。下士官は古年次兵を、将校は下士官を制裁した。その間、死に至る制裁を受けようとも、下級者は不動の姿勢

を崩さず、殴る上級者に抵抗してはならなかった。この一方的な暴力がゆるされるのは、下級者の服従精神を逆手にとっているからである。すなわち、上官は常にあやまちをおかさぬ絶対的な存在であり、軍人勅諭に示されてある「・・・新任の者は旧任の者に服従すべきものぞ、下級のものには上官の命を承ること実は朕が命を承る疑なりと心得よ」の命令、天皇陛下の命令として制裁を受けるからである。そのくせ、表面的には、軍隊内務では一応、リンチは禁じられているのであった。この矛盾を軍上層部がみて見ないふりをし、あるいは、無言の奨励をしていた事實は、強い兵隊を教育をするためのやむをえない処置と考えていたからであろう。

世界に類をみない残酷な私的制裁は、陸海軍を問わず日本軍隊の避けられない悪い伝統となり、二年兵から受け継いだリンチを初年兵が継承して次の初年兵に、からだで申し送っていたのである。軍隊が監獄のように辛いところだと言いつづけられたのは、この指摘制裁のすさまじさと、絶対に反抗をゆるされないシステムにあったといえよう。

船倉が終わって命令系統の階級を失くしたかつての情感が、奴隷的な境遇に耐えてきた下級兵士の報復をうけたのも当然のことであろう。だが、一部扇動者の発作的なリンチ事件が、母国の山河を目の前にして燎原の火のごとく広がる形勢は情けないことだ。それは爆発であり、狂気であり、無意味な破壊に通じるだけのものであった。悪いのは、権力におごって兵士たちをドレイ扱ひした上官だけではない。国をあげての富国強兵の教育方法そのものに陥穽があった。前近代的な日本の体制そのもののありかたを、あらためて批判しなければならないであろう。私はすきゆく暴風を待つかのように、じっとよこたわっていた。両耳をふさいで耐えていた。

「ここだ！」と、だれかの声がした。薄暗い私のテント内へ首を突っ込んできたものがある。

「貴様、少尉、外へでろ」私は目をあけた。さきほどの、大隊本部の荒川上等兵が殺気だった顔つきで立っていた。「俺のことか。何の用があるんだ」

「なんでもよい。外へ出ろ、この野郎」

このような威嚇を、私は兵士から受けたことがない。さては、渡辺中尉をかばったことを根に持ち、因縁をつけにきたのであろう。そう思って、私はわるびれずにテントの外の通路に出て行った。いきなり、三、四人が襲い掛かってきた。頭や顔に数撃をくらって、わたしはよろめいた。

「話があるなら言え。いきなりなにをする。おれは、きみたちに指一本もふれたことはないはずだ」

相手はこたえなかった。荒川の鉄拳が頬にとび、私の竹縁の眼鏡がくだけてふっとんだ。わたしは逆上した。荒川めがけて反撃にでた。彼らは束になってかかってきた。頭をなぐられてふらつくところを、横原をけりあげられた。うっと呻いてかがみこんだところを、前後から容赦なく拳の雨。鼻血がどっとふきだして、濡れた甲板にしたたり流れた。脳震盪をおこしたのか、くらくらしき気がとおくなり、ふらりと膝をついたところをめっちゃめっちゃに蹴り上げられた。四つん這いとなり、なにくそ、ゆらゆらと立ちあがる。そこへすどいアッパーカット。私の顔は血だらけになっていた。

「おい荒川、ちょっと待て」通りがかりの兵士が、私たちのあいだに立ちはだかった。

「なんだと？ 妨害する気か」

荒川は気負いこんだ。わたしはおぼろげに兵士の顔を認めた。ふわふわと、二人にも三人にも見えて左右にゆらめいている顔は、私の小隊の松田上等兵、木下一等兵らしい。

「この少尉は、やめておけ」木下が言った。

「なぜだ？」

「まあいい。おれたちに任してもらいたい。話はあとでつける」

私の前にかばうようにして立った木下の声には威厳があった。松田、木下は、アンボン軍曹事件のとき、はげしく私に殴られた中の二人であり、また常々仲間にもおそれられているうるさ型の中年者で、イレズミのある兵士である。二人の睨みが効いたらしく、荒川たちはうなづいて退散した。(これだけ叩きのめしたら気がすんだだろう。だがなぜ、おれは奴らにふくろだたきにされなければならんのだ?)

「隊長殿、大丈夫ですか。今夜は、テントから一歩も出てはいけませんよ」

二人は私を支えた。私は二人を特別に寵愛したおぼえはない。それなのに二人は、前と同じように「隊長殿」と言った。私はあわてて竹縁のこわれた眼鏡をひろいあげた。くやしかった。今日まで言葉を交わしたこともない荒川たちに、無残なリンチを加えられたのが悔しかった。あまりにもみじめであった。

(なぐられる理由はない。ちくしょう！)

私は、眠れなかった。テント内で、私の部下の百田上等兵ら三、四名の話し声が聞こえた。

「おい。野間軍曹をつるしあげに行こうじゃないか。あいつは、兵隊から時計をまきあげて、金に換えていやがったんだ」

「おれも、やられた口だ」

「盗んだ金時計を、検閲で取られたくねえからと言って、俺に押しつけるとは、ぬすっとただけしいとはあいつのことだ。あいつをやっつけろ」「あいつはどこのテントだ」

ぞろぞろと四、五名が出て行った。

夜がふけてゆく。私はむかむかして、どうしても気持ちがおさまらなかった。まだ、からだのふしふしは痛かったが、しばらく横になっていたせいか、打撃の疲労はおさまったようだ。屈辱と憤怒。誇りを傷つけられた悲しみが潮のように満ちてきて、寝ていられなくなった。

「今夜中にけりをつけてやる」

つぶやくと同時に、毛布をけて跳ね起きた。荒川一味を探し出し、理非順逆を説き、かれらを摺伏させずにはやまない。なぜ、おれをなぐったのか、理由を追求し、納得するまでは引き下がれぬ気持であった。

闘志がふつつつと湧いた。私はテントの外へ出た。周囲を睥睨しながら甲板上を歩いていった。若気の至りで、わたしは頑固に、荒川たちのリンチにあくまでもこだわろうとしていたのである。見

知らぬ暴徒たちは相変わらず、うろついていた。

「ようし！ 将校は、見つけ次第みんなやっつけろ。袋叩きにして海へ放り込め」

私は、憎悪にみちた兵士たちの叫び声を聞いて、思わずものかげへはしりこんだ。私は無階級の血気にはやった若者の心情になっていたのであるが、かれらの雄叫びは胸をつきさした。私も将校であったのだ。「将校はやっつけろ」とわめく兵士の、「将校」というにくにくしげな発音には、底深い呪詛がこもっていた。彼らは、ひとりの悪辣な将校ではなく、将校全体を恨んでいるのだ。見つけられたら、だれかれの容赦はなく海になげこまれるであろう。

(ああ、将校はこれほどまでににくまれていたのか。彼らの絶叫どおり、将校はみんな地獄の鬼であったのか)

荒川一味が私を襲撃した理由が、のみこめた。今日の将校は全部、下士官・兵士の敵であったのだ。わたしはもう、テント内にひっこんでいるよりほかはないと思った。癩だが、小さくなって暴徒たちから身を護っている。こんなバカなことってあるか。しかし、そうするよりほかには道はない。

暴徒集団の立ち去ったスキをみて、私はテントへ引き返そうとした。断腸の思いであった。おれだけは正しかった、と言ってみるところではじまらない。(みんな醜悪だ。こんなあと口の悪い軍隊の最後をみるとは思わなかった)

深夜の十二時すぎ、私は用便のためしかたなくテントを忍び出た。テントの近くに仮設の便所があった。天井も扉もない。二本の長い板の上にしゃがんで、用をたすだけの便所であった。用便中に、うしろから肩を接している兵士になぐりつけられるおそれもあった。糞尿の上に伏せて悶絶する自分のみじめな姿を想像すると、足もにぶった。ミノもクソもいっしょになってしまったような、汚らしい恐怖が私をとらえる。これが、「軍人は礼儀を正しくすべし(軍人勅諭)」の反動なのか。皇軍の本当の姿であったのか。

順番を待っている男のうしろへ、私は用心深く並んだ。(なんだ、福竹准尉じゃないか。これはひどい)

私はその男が、苦楽を共にしてきた隣小隊長の福竹准尉であることに気がついた。彼は、しょんぼりとうなだれ、顔をまっかに晴れあがらしていた。リンチを受けたのだ。

「福竹さん、あんたがやられるなんて、ひどい」

私は、変形した福竹准尉の顔をのぞきこんでいった。准尉はピクリとしたが、腫れあがった目をおさえながらかすかな苦笑をもらした。

「やあ、貴公は無事でしたか」

「いや、私もやられた組です」

「ごらんのとおりに、ふくろ叩きもいいところです。」

福竹准尉は下士官上がりの現役で、歴戦の勇士である。軍人としてのスジ金が通っている。私のようなボケ茄子同様の幹部候補生上がりとは雲泥の相違で、戦争中は責任観念旺盛かつ几

帳面な性格からみて、また、武術、戦闘体験の実績からみて、ゆび一本指せる兵士はいないはずだ。その福竹准尉が准士官で小隊長であったために、十把ひとからげの将校打倒にまきこまれたのか。あるいは、人事係であったために、勤務割りその他で不満分子のうらみを買っていたのか。それにしても、一心不乱、つねに公正をむねに軍務ひとすじに励んできたまじめな准尉をふくろだたきにするとは、ひどすぎる。

「おれは、おれのやったことを後悔していないよ。だが、日本は負けたんだね」ポツンと言い、准尉は前の者と交替して便所の敷板をまたいだ。

荒れ狂ったリンチ暴風は、翌朝になるとケロリとおさまっていた。暴徒たちは快活で従順な復員兵に変わっていた。子供のようにはしゃいで下船準備をいそいでいる。憑き物が落ちたような感じであった。私も平静を取り戻した。

あの猛威をたくましくした軍隊が、屈辱的な敗戦で静かな終焉をとげるはずはない。八月十五日の日本陸軍最後の日は、少壮軍人の反乱もあつたりして、おいそれと無条件降伏にしたがうわけはなかった。復員船のなかで兵士たちが暴動をおこすくらいのは、海中の泡みみたいな事件でしかなかったであろう。何事もなく済むほうがおかしいと言えないこともない。結局一夜明けると、繃帯で頭を巻き、顔に絆創膏を張り付けた元将校・下士官が、てれくさそうにニヤニヤしていた。最もひどいのは、かねがね私が顔だけは知っている、足腰たためほどやられて担架で下船してゆく元少佐殿であった。だが、海になげこまれた者は一人もいなかった。

リバティ船からボートが降ろされ、復員者の下船がはじまった。すると、下船準備をしている私のもとへ、見知らぬ兵士が命令書をたずさえてきた。まだ命令があるかといぶかりながら書面に目を向けると、「奥村少尉は下士官・兵十五名を指揮し、本船より最終ボートに移す軍貨物の揚陸作業に任ずべし」と、書いてあった。命令者の署名はない。たぶん、輸送指揮官の命令にちがいないが、私は苦笑せざるを得なかった。

(最後の土壇場まで揚陸作業か)

本船には元将校が五十名以上いたから、なぜ、私を指名したのかわからないが、復員式を終わるまでは軍隊の形式を残しているのか。「まあ、最後の御奉公だ」と、私は不服そうな兵士たちを納得させた。

私たちは、最終のボートにのりうつった。ガラガラとクレーンが動きだした。クレーンの操作は船員たちの役目である。ワイヤロープの先についている二個の金具の爪が、数個の貨物を包んだ金網にひっかけられて、ボートの上におろされた。一方の爪を外してクレーンを巻き上げると、金網中の荷物が自然にボート上に転がり落ちる。私たちは転がった荷物を積み上げ整理する。簡単な作業を十数回くりかえせば終わるはずであった。しかし、兵士たちは動かなかった。

「命令？ もういやだ。服従にはこりごりだ。こうして、おれたちは騙されつづけてきたんだ」一人が言うと、みんな腰をあげなくなった。

「軍貨物？ 軍はなくなったはずではないか。けっきょくお偉方が分配するんだらう。おれたちにも分けるっていうなら話は分かるが・・・」

ようし、俺一人でやってやる。私は怒り、一人で貨物の整理にとりかかった。医薬品らしい梱包と、ドンゴロス袋など、合わせて三十個ほどの貨物であった。ドンゴロスの破損した袋からコーヒー豆がこぼれ落ちた。セレベスはコーヒーの産地であった。そういえば、このコーヒー豆袋はパレパレ港で復員船に乗せられたことを私は見ていた。ともかくそのときは、当時の値段で数十万円もするであろうこの荷物が、兵士たちの実につまらぬ所持品まで没収したオランダ検閲官たちの監視の目を、いかにごまかしたのであろうか。不審な数個の貨物は、医薬品梱包であった。こんな貴重な医薬品がのこっているくらいなら、なぜ、患者をバタバタ死なせる必要があったのか。しかしわたしには、上層部の考えることはわからない。これがどこへ運ばれるかも知らない。和t氏がひとり汗だくで仕事をしたのは、命令でなくてもそれが悪事でもないかぎり、他人様にことを頼まれたら簡単には断れないという倫理上の立場からであった。

第四回目のクレーンから、見るに見かねたのか坂本伍長の発生で、四、五名が腰をあげた。作業が終り、船員の先案内でボートは復員者の上陸岸壁とはすこし離れた人影のない岸壁に係留された。そこには、他の船員とトラックが待っていた。私たちは貨物を揚陸し、道を聞いて、すでに上陸している部隊を追った。さあ、すべてはこれで終わった。私はがっしりと母国の土を踏みしめた。

翌朝、田辺港復員バラックで、型通りの復員式が行われた。みんな上の空で、輸送指揮官北条大佐の訓示など聞いていなかった。式が終わると、そろそろ国鉄田辺駅にむかった。駅頭で新聞を買った。

一つの記事が、私の目を吸いつけた。

「コーヒー豆闇売り摘発」

セレベスよりの復員船船長岡本容疑者を厳重取り調べ中というのが、記事の内容であった。（和歌山田辺新聞社長宮本俊作氏に確認）

私は茫然とし、怒りを爆発させた。日本人の恥さらしだ。ひどい奴もいるものだ。だまされた私は、いい面の皮。しかも、部下の怠業を不満に思いながら「人生意気に感ず」とばかり、最後の御奉公に挺身した。なんというお人よしか。悪党の片棒をかつがされていたのだ。腹が立って立ってたまらなかった。

そこで復員船船員の話思い出した。内地の某部隊の将校が、復員のどさくさにまぎれに、軍の衣服や糧秣を盗み出し、家郷へ運んだという話である。「うまいことやった将校を、いくらでもしていますよ。セレベス帰りの将校さんは気の毒ですなあ。小さい背負い袋ひとつの、まるで裸同然じゃないですか」と、その船員は言った。

私はなさけなかった。敗戦という一億同胞悲哭のさなかに私腹を肥やす火事場泥棒みたいな

エゴどもが、国内外のいたるところに多数混じていたのだ。

私のムカムカは容易におさまらなかった。復興の息吹きが新生日本を包んでいる半面、弱肉強食の闇市場に、百鬼夜行の醜悪なエネルギーがうずまいている。そこへ還っていくのだ。覚悟を新たに立ち向かわねばならない。

田辺駅から復員列車に乗り込んだ。列車がうごきだすと、私が生まれ育ったなつかしい紀州の初夏の田園風景が窓外に展けはじめた。

「復員者のみなさま、ながい間、ごくろうさまでございました」

車内販売のサービスガールはいつてきた。みずみずしい日本の娘二人。私はひさしぶりに大和撫子の楚々たる風情、なつかしい娘たちの声にふれただけで胸が熱くなった。やっぱり、日本はいい。なぐさめられ、いたわられ、包み込まれるような気がした。母国という実感が体中に染み渡った。

たとえ祖国が荒廃していても母なる故郷に抱きとられて、これから復興の捨て石になろうという勇気が、りんりんと胸中に鳴り響いてくるのを感じた。私はさきほどの怒りをわすれた。これから、軍人でない私の第二の人生がはじまる。強烈な陶酔に近い情感にゆさぶられながら、心は一筋、家郷に向かって矢のようにはしっていた。列車のスピードがあがり、乗り心地はまさに天国であった。

あとがき

本書は、私が第二次大戦中陸軍の一小隊長として、南方ハルマヘラ、セレベス戦線に参加した終戦前後二か年あまりの体験をまとめたものである。

私はいつか、私なりの戦争体験を一書にまとめたいと考えていた。軍隊の四年間は、私の青春期にあたっていた。生涯、忘れようとしても忘れられるものではない。本を出そうというような大それた考えではなく、個人の記録としてもぜひ書き残しておくべきだと思った。手を付けぬままに年月が過ぎて行ったが、年をへだててあの四年間を客観的にながめると、あれは、個人的な記録にとどまらず太平洋戦争の一側面を照らし出す貴重な資料になるのではあるまいかと考え、いまになってやっと執筆に踏み切ったわけである。

セレベス島北東部(ビトゥン)から、赤道標を越えて南下し、南部セレベス・マリンプンまで約三千キロの難路を軍装で踏破した私たちの部隊の体験を、そのまま闇に葬り去ってしまうのは惜しい気がした。血まみれの激戦記ではなく、セレベス島の秘境を探検したにすぎない(地獄の)冒険物語も、実は、追いつめられた日本軍のあがきを側面から照らし出して、戦争の残酷さ、むなしさを風刺することになるのではないか。そこのところが、いくぶんでも伝えられていたとしたら、また、

人跡未踏の秘境や、現地住民、蛮族などの生態が、セレベス島紹介の一助ともなりえていたとしたら、本書の目的は達せられたというべきであろう。

文中の年月日については、私の軍歴書や、復員後思い出すままに記録しておいたメモをもとに、ハルマヘラ・セレベス方面軍の行動状況などは防衛庁戦史室に問い合わせ、地理、地名なども戦後入手した詳細な世界地図を参照して正確を期した。他の参考文献は別記の通りである(以下、省略)

(セレベス戦記 完)

著者略歴 奥村 明

大正7年 和歌山市生

旧制和歌山中学、山口高校、京都大学法学部卒業

昭和17年陸軍歩兵第37連隊入隊

終戦時は陸軍少尉

昭和49年「セレベス戦記」初版発行 (図書出版社)

昭和50年1月 2版発行

(解説)

本書がどのような意図をもって執筆され、そしてどのような性格を持つ作品であるかという点については、執筆者が(あとがき)で明瞭に示している。

「…(地獄の)冒険物語も、実は追いつめられた日本軍のあがきを側面から照らし出して、戦争の残酷さ、むなしさを風刺することになるのではあるまいか。そのところがいくぶんでも伝えられていたとしたら、また、人跡未踏の秘境や原住民蛮族などの生態が、セレベス島紹介の一助ともなり得ていたとしたら、本書の目的は達せられたというべきであろう。…」

一読者として一つ付け加えさせていただければ、俘虜収容所の生活や復員船でのリンチ事件の記述などから、旧日本軍の欠陥あるいは宿痾みたいなものが行間に浮かび上がって、戦後育ちの私にもはっきり見えた。気分的には良くないけれども大変勉強になりました。(長崎)

